

SPECIAL INTERVIEW

研修医時代を振り返る ～10年後の自分～

INTERVIEW.

01

人に恵まれ、若手医師が活躍できる環境が
医師として大きく成長させてくれた

東京医療センター 総合内科 山田 康博

■ 今までの勤務歴

2004

久留米大学病院 初期臨床研修医

2006

国立病院機構 東京医療センター 総合内科 レジデント
上記研修中に以下院外研修

2007

国立病院機構 さいがた病院 出向

2008

国立病院機構 栃木病院 出向

2009

総合内科チーフレジデント

2010

聖路加国際病院 聖路加ライフサイエンス研究所にて臨床研究
Veterans' Health Administration Greater
Los Angeles Healthcare Systemにて研修

2011

国立病院機構 東京医療センター 総合内科 医師

■ 資格

日本内科学会 総合内科専門医・指導医
日本プライマリ・ケア学会 認定医・指導医
American college of physician member

**医師としての大切な“勘”を養った
豊富で多彩な症例経験**

卒後3年目の後期研修から「東京医療センター」の総合内科に勤務しています。当院を研修先として選んだ理由は、当時から総合内科に実績のある数少ない病院の一つだったこと。見学時に後期研修医の先生方に話を聞くと、他病院ではネガティブな発言をする先生が多いなか、当院の先生方は「忙しいけれど、本当にいい病院だよ」とポジティブな言葉ばかりだったからで

す。医師が忙しいのはどこも同じ。忙しくてもやりがいを持って楽しく働くことができるか。大きな学びと成長があるか。当院にはそうした環境があったと感じましたし、入職してからもその印象はずっと変わっていません。

当院は740床という大規模病院にも関わらず、他部門や他科との風通しが良く、仕事のしやすい環境にあります。臨床としては、幅広い症例の患者さんが集まる病院であり、救急外来では風邪や肺炎などのありふれた疾患から、くも膜下出血、心筋梗塞、消化管の穿孔という緊急性の高い疾患まで幅広く経験できたことで、重篤な疾患を見逃さない医師としての大切な“勘”を養うことができました。



先生方の出身大学はさまざまであり、全国のグループ病院から若手医師が集まる勉強会など交流も盛んで、幅広い考え方を自然と学ぶことができる環境です。研修では複合プログラムにより、それぞれに得意領域や特性のある全国各地のグループ病院で経験を積むことも可能で、私は「栃木医療センター」でも研鑽を積みましたが、その際は身分や処遇が変わることなくスムーズに研修を続けることができました。こうしたことも国立病院機構ならではの大きな魅力だと思います。

**学ぶ意欲とやりがいを生む
優れた指導と教育環境がある**

当院には屋根瓦式教育が根付いており、早くから指導者としての経験も積むことができます。また、若手医師が中心となって勉強会を開き、発表や提案したことが上の先生方に認められ実臨床に還元されることも多々経験しました。さらに私が入職した当時は総合内科の医師が少なく、後期研修医であっても組織づくりに大きく関わることができ、リーダーシップも学びました。振り返ると、人に恵まれた10年間であり、学ぶ意欲とやりがいを生んでくれた先生方の指導や若手医師が活躍できる環境が、自分をここまで成長させてくれたのだと感じています。

医師になると、学んだことや教科書通りにいかないなど、医療の不確実性を実感することが多々あります。そうしたなかで最適な医療を提供するためには、主体的に学び、考え、経験を積み重ねていくことが重要です。診療では患者さんの訴えをしっかり受け止め、身体所見、生活背景、価値観について、誰よりも一番詳しくなることを心掛けてほしいと思います。そして、上級医にどんどん意見や提案をしてください。それが新たな学びとより良い医療を生み、さらなる成長に繋がるはずです。国立病院機構にはそれができる環境があります。



同期との集合写真

PROFILE

出身地 : 長崎県長崎市
出身大学 : 久留米大学(2004年卒)
宝物 : 家族
座右の銘 : 一期一会



PROFILE

出身地 : 福岡県太宰府市
出身大学 : 久留米大学(2010年卒)
趣味 : 寝ること、食べること
宝物 : 家族
座右の銘 : 人事を尽くして天命を待つ

教育に実績があり、雰囲気も抜群 積極的な研修ができる環境です

初期研修から「長崎医療センター」でお世話になり、現在は救急医として当院の高度救命救急センターにて日々、診療に励んでいます。

当院を研修先を選んだ理由は、説明会や見学時の雰囲気が抜群に良く、研修医の先生方の生き生きとした姿を見て、ここでなら積極的に経験を積むことができると感じたからです。当院は離島医療を担う医師を育成する使命があるため、現在の初期臨床研修制度が始まる以前から複数診療科によるローテーション制度を取り入れてきた医師教育に実績のある病院です。どの診療科も教育熱心で教育体制がしっかりしており、また、誰にでも相談しやすい環境であるため、委縮することなく積極的に研修に励むことができました。



救急の道に進んだのは、初期研修1年目の最後に救急を回った際、救急の基本的スキルを1年間で習得した後に専門科研修に進む後期研修の先生方の姿を見て、「1年でこんなにも救急対応ができるようになるんだ!」と感銘を受けたことがきっかけです。苦手な救急医療を克服したかったですし、どの診療科に進むにしても救急対応のスキルは必要だと思い、最初は年間だけのつもりで救急を学ぶことにしました。先生方は教育熱心で懐がとても深く、何もできない私を温かく長い目で見てくださり、のびのびと学ぶことができました。救急の面白さも知ることができましたし、日々成長している実感やできるようになった

喜びが、さらなる学びの意欲に繋がりと、救急医になろうと決めました。最初は何もできなかった私が救急専門医の資格を取得し、救急の第一線に身を置くまでに成長できたのは、当院の医療環境や教育体制のお蔭だと感じています。

患者さんに一番身近な医師となり 常に患者第一で全力を尽くすこと

研修医時代に教えられた印象的なことは、患者さんとコミュニケーションを取り、その患者さんにとって一番身近な医師になること。患者第一で何ができるかを常に考え、一人ひとりに最適な治療を選択するために全力を尽くすこと。今でもこの教えは、自分が迷ったときの大きな指針となっています。

救急医療は内科的、外科的、全身管理などの幅広いスキルが必要です。救急患者さんは短時間でさまざまな変化が起こるため、先を読む力や決断力も重要となります。救急科での研修は将来何科に進んでも医師として大きく飛躍するための土台となるはずですし、自分の行った医療がダイレクトに反映されるため学ぶことも多く、やりがいの大きな診療科です。研修医の2年間は色々な世界を経験できる2度とない貴重な時間です。国立病院機構には、豊富な経験とチャレンジができる素晴らしい医療環境が用意されています。苦手なことであっても積極的にチャレンジすることで自分が進むべき診療科が見つかるはずですし、医師として大きく成長することができると思います。

INTERVIEW.

02

苦手だった救急医療の面白さを知り 今では救急の第一線に携わる医師に

長崎医療センター 高度救命救急センター 白水 春香



地域医療研修にて生月病院で研修
休日の平戸観光

■ 今までの勤務歴

2010 国立病院機構 長崎医療センター 初期臨床研修医
2012 国立病院機構 長崎医療センター 救命救急センター レジデント
2014 国立病院機構 長崎医療センター 救命救急センター 医師
2018 国立病院機構 長崎医療センター 高度救命救急センター 医師

■ 資格

日本救急医学会 専門医
日本DMAT隊員
厚生労働省認定臨床研修指導医

■ 所属学会

日本内科学会 日本外傷学会
日本急性血液浄化学会 日本航空医療学会
日本集中治療医学会